私のイスラーム研究の回顧

加賀谷　寛

本日は、「知の先達」などという大変名誉ある呼び方でお招きいただき、ありがとうございます。世代的に半世紀前くらいからイスラーム研究に携わってきたということにすぎませんが、研究をめぐる環境が研究を始めたときから今日まで変化してきたように思いますので、私のイスラーム研究の回顧を含め、そうした環境の変化をご紹介したいと考えています。皆さんがご存じないような古いことになりますけれども、半世紀ほど前の話からさせていただきたいと思います。

1.　地域研究――言語とディシプリンという二つの柱――

地域研究というものをイスラーム世界について最初に提言したのは、ギブ（Hamilton Alexander Rosskeen Gibb, 1971 年没）であったかと思います。地域研究には二本の柱があるとギブは述べています。一つ目の柱は言語です。

中東の言語にはアラビア語、ペルシア語、トルコ語などがありますが、周辺の言語を加えるとすれば、ウルドゥー語も含まれてきます。私はこのウルドゥー語から勉強を始めました。ウルドゥー語はみなさんご存知のようにペルシア＝アラビア文字を使っております。ですからウルドゥー語からペルシア語またはアラビア語に入っていくときには、文字が共通するので比較的入りやすいという事情がありました。ところで、『ウルドゥー語辞典』のなかを見ていただくと、語源がアラビア語、ペルシア語のものが非常に多いことがお分かりでしょう。歴史的にこのあたりのことをもう少し概観してみたいと思います。

アラブの征服がサーサーン朝イランに及び、イランを征服したアラブは、ホラーサーン、東北イランの方に軍営地を作って――ウルドゥー語のウルドゥーという名前は、トルコ語でキャンプとか軍営地を指します――、それからさらにマー・ワラー・アン＝ナフル、つまりトランスオクシアナ、オクソス川（アム川）の向こう側に軍営地を拡げていくわけです。その間に、アラブ人とペルシア語を話すイラン人が接触する機会が重なっていき、その結果、今日見るような近代ペルシア語のかたちが出来ていったのだと思います。

こうして成立した、ホラーサーンから小アジアの方まで広範囲に使用された近代ペルシア語ですけれども、それが 13 世紀以降のことになりますか、中央アジアのペルシア語を使うトルコ系民族がインドに入って、ヒンドスターン、つまり北インドの方に進入して、ご存知のデリー王朝を作るわけです。デリー王朝は複数の王朝の総称になりますが、そうした王朝を建てたのは中央アジア系のトルコ人の征服者が多かったかと思います。しかし、トルコ人はトルコ語（テュルク語）を宮廷の言語として使っていませんでした。トルコ人はペルシア語を使用し、ペルシア文化をデリー周辺にもたらしました。

ウルドゥー語にはこのペルシア語とアラビア語が入りこんでいるのですが、以上に述べた歴史的な事情で、アラビア語は直接的でなく、イラン経由で入ってきたということになります。それからペルシア語もイランからというよりも中央アジアのトルコ系征服者の手によってインドにもたらされたという背景があります。そうしたウルドゥー語成立の事情もあり、ウルドゥー語を勉強していた私は、どうしてもペルシア語を勉強しなければいけないということになりました。宗教とか文化

に関わる高級語彙に関して言うと、ペルシア語からの借用語がウルドゥー語の語彙の大部分を占めるので、ペルシア語も勉強したということであったと思います。おもしろいことに、デリー・サルタナトというデリー王朝を建てたトルコ系支配者は、トルコ語を宮廷の言語としては広めようとはしませんでした。ペルシア語を支配者の言語として使ったということです。

すでに述べましたように、アラビア語が直接ウルドゥー語のなかに入った例はごく少ないのですが、アラビア語はコーランの言語であり、礼拝とかその他のイスラーム法の言葉としてイスラーム世界に広く使われていますので、その意味で、アラビア語もウルドゥー語のなかに入っており、ウルドゥー語を使う人々は、アラビア語の発音が出来なくても、文字は間違いなくその文化に残しております。

複数の言語が絡み合うといった事情も含めて、はじめに地域研究の一本の柱として、ギブはイスラーム世界の言語ということを挙げたわけですけれども、それに加えて、もう一つの柱として、人文科学、社会科学の方法論、つまりディシプリンを挙げており、これを研究者は持たなければいけないとギブは述べています。彼は社会科学や人文科学の方法論と言語との結婚を地域研究だととらえていたのだと思います。日本のイスラーム研究、地域研究はこのギブ流の考え方を今日まで持ち続けていると言ってもいいでしょう。

数あるディシプリンの中で何が地域研究なのかと申しますと、私の時代では現代研究のことでした。古典研究とか歴史研究とかは存在しましたが、現代イスラーム世界の研究はほとんどありませんでしたので、まずは歴史研究の分野から現代研究に興味をもたれるという方向が多かったように思います。当時の東洋史研究者のなかでは、インド中世史を専門になさりながら、イギリス支配下の近代インドや現代のインドに対して新しい問題意識を提起されている方がいらっしゃいました。名前を挙げると荒松雄さんという方です[1)]。他方、西洋史研究の分野では、ヨーロッパのイギリスやフランスなどの植民地への帝国主義支配という問題があって、その方面から生じたアジア・アフリカの民族運動に対する関心がその当時は高かったようです。イスラーム世界の研究者としては、西洋史からは板垣雄三さんなどがいらっしゃって、イスラーム世界の民族運動といった現代的な問題を採りあげていました。それからかなり遅れると思いますけれども、人類学の分野から、片倉もとこさん、先年亡くなられた、大塚和夫さんが新しく出てこられたわけです。

2.　研究してきた環境をふりかえって

私は東京外国語大学でウルドゥー語を勉強しておりました。その時の先生が、蒲生禮一という先生です[2)]。先ほど申しましたように、ウルドゥー語を学ぶうえで、ペルシア語を学ぶ必要がありました。それで、蒲生先生は、ウルドゥー語をご教授なさる傍ら、ペルシア語の文法も入門程度でしたけれども教えてくださいました。1925年（大正14年）から1964年（昭和39年）まで東京外国語大学で教鞭をとっておられました。

戦前、戦中にかけては大変な時代だったと思いますが、蒲生先生がその期間どのようなかたちで研究をすすめていらっしゃったのかを少しお話ししておきます。蒲生先生よりも少し前の世代の方

1）　荒松雄（1921年～2008年）。専門はインド史、南アジア史。東京大学名誉教授、恵泉女学園大学名誉教授。著書に『インド史におけるイスラム聖廟――宗教権威と支配権力――』（東京大学出版会、1977年）、『中世インドの権力と宗教――ムスリム遺跡は物語る――』（岩波書店、1989年）『インドの「奴隷王朝」中世イスラム王権の成立』（未來社、2006年）など。

2）　蒲生禮一（1901年～1977年）。専門はペルシア語学、ウルドゥー語学、イスラーム学。元東京外国語大学ペルシャ語科教授。著書に『イランの歴史と文化』（博文社、1941年）、『ペルシア語文法入門』（大学書林、1983年）、『ウルドゥー語入門』（泰流社、1976年）、『イスラーム――回教――』（岩波新書1973年）など。

で大久保幸次さんという先生がおられました[3]。大久保幸次さんは、回教圏研究所を主宰し、『回教圏』という雑誌を何年かに渡って出しておられて、日本のイスラーム研究者、中東の研究者がその雑誌に寄稿しておられました。おそらく共同研究もこの回教圏研究所で先駆的になされていたと思います。大久保幸次さんの回教圏研究所というのは、戦時中の窮屈な雰囲気の中で、比較的リベラルで、自由な雰囲気のもとで研究班を作っていたと聞いています。厳しい弾圧を受けていた日本の共産党の人たちもこの研究所に身を寄せると安全だったというようなこともあったようです。また、ずいぶん意外な人もこの回教圏研究所に入っておりまして、イスラーム研究者でない人も入っています。そんな中で蒲生先生は、比較的いい雰囲気の中で戦争中も特にイランに関する研究をすることが出来たようです。蒲生禮一さんは、晩年には、ウルドゥー文学よりもペルシア文学に興味が傾いていって、ペルシア文学の世界で西暦13世紀にサアディー（Sa‘dī al-Shīrāzī, 西暦1283年か1291年没）という詩人がいて、その著作には、散文と詩の両方からなる『薔薇園（グリスターン）』という古典があります。蒲生先生はそれを和訳なさっており、平凡社東洋文庫に収録されています[4]。なお、ちょうど同じ頃ですが、大阪外国語大学の澤英三という先生が岩波文庫から同書の翻訳を出されています[5]。

このような状況のなかで、私はウルドゥー語を勉強しはじめながら、ペルシア語にも関心を持つようになっていったわけです。その後、東京大学宗教学宗教史学修士コースに入学を許されました。宗教学宗教史学研究室にイスラーム研究の専門家はおられませんでしたが、世界の宗教史といったものを広く見るということができるようになったかと思います。

宗教学宗教史学修士コースを終えると、東京大学内にある東洋文化研究所の助手として採用されました。1956年の春のことです。その年の暮れにイランのテヘラン大学文学部から日本の文部省宛に給費留学生を募集していると聞き、それに応募してテヘラン大学の文学部に留学する機会をえました。今まで遠く離れて、文献を通じて間接的にしか接触がなかったイランという国を直接学ぶことができるようになったわけです。そこで、個人的にではありますが、現代のペルシア語の出版物をできるだけ集めようと思いたちました。というのも、当時、現代のペルシア語の出版物が日本にはほとんどありませんでした。これからは現代のペルシア語文献を通さないでイランの近代史、現代史を論ずることはできないと留学中に痛感したからです。

もうひとつ現地で知ったことがあります。現代のイランはシーア派が多数を占めるわけですけれども、シーア派の信仰で興味を惹かれたのはイマーム・ザーデ崇拝です。イマーム・ザーデというのは、ペルシア語をご存知の方はお分かりかと思いますが、イマームの子孫、イマームの血を引く者を意味し、彼らを祀った墓廟もイマーム・ザーデと呼ばれます。これが至るところに存在しているわけです。そしてイマーム・ザーデ崇拝は、いわゆる一般的なスーフィズムの聖者崇拝や聖者廟崇拝に近いと気がつきました。これも現地に行ってみて初めて気がついた点です。

しかし、そのころ私が持っていた問題意識は、近現代イラン史をイギリスやロシアのイラン支配に対してイランのナショナリズムが抵抗する歴史として考えたいという方向のものでした。イマーム・ザーデの方は、少しはイスラーム的なトピックに触れるわけですけれども、それ以外は、むし

3）大久保幸次（1887年～1947年）。トルコ語学者。外務省および日土協会（現在の日本トルコ協会）により派遣された先のトルコで知り合った徳川家正（駐トルコ特命全権大使）の資金援助を受け、1938年に回教圏研究所を設立し1945年に空襲で焼失まで所長を務めた。

4）サアディー著 蒲生礼一訳『薔薇園――イラン中世の教養物語――』（平凡社東洋文庫12、1964年）。なお蒲生訳の初出は、シーラーズのサアディー著、蒲生礼一訳『薔薇園』（東京外国語大学論集別冊第2、1953年）である。

5）サァディー著 澤英三訳『ゴレスターン』（岩波文庫、1951年）。

ろイランのナショナリズムの方に問題意識をもって研究していました。そうしたこともあって、ある方からは、どうも日本でのイスラーム研究というのは近現代史の歴史研究に偏りすぎているのではないかという批評もいただいたこともあります。

助手時代には、1958年に国際宗教学宗教史会議（World Congress of the International Association for the History of Religions）が東京で開催され、その時はイスラーム研究者の方もかなり来日されました。そのなかにフランスのルイ・マスィニョン（Louis Massignon, 1962年没）という先生もいらっしゃり、東大の宗教学の研究室にご案内したことがあります。大変温厚なお人柄で、感銘を受けたことを覚えています。

この頃の東京大学の中央図書館には、イスラーム関係の参考書というと、関東大震災のお見舞いにイギリスから寄贈された東洋学関係、イスラーム関係の本がわずかにあるばかりでした[6]。そして後で知ったのですが、荒木文庫というのがあって、アメリカのコロンビア大学に留学された荒木茂さん[7]――『ペルシヤ文学史考』という本を書いておられます[8]――がアメリカで収集されたイラン関係の物がわずかにあったかと思います[9]。しかし荒木文庫を拝見したのはずっと後のことです。

それ以外に、イスラーム関係のヨーロッパ語文献をそのころ組織的に集めていたのは天理大学です。天理大学では中山真柱が熱心に蔵書を蒐集されていたため、天理大学の図書館に行けば、世界の他の文化のものでも同様ですが、イスラーム関係の貴重な書物が見られたと記憶しております。現在では、外国の参考文献はだいたい自分で手配すれば手に入るという時代になりましたが、当時はまだそうした状況にありませんでした。

1961年から大阪外国語大学に転職いたしまして、先ほど少し触れました澤英三先生の後を継ぐことになり、ウルドゥー語と同時にペルシア語もしばらく教えることになりました。足利惇氏先生からペルシア語とかウルドゥー語を教えてほしいということで、10年ほど、学生運動が激しくなるころまで京都大学に出向しておりました。それを機会に、京都大学東洋史の学生のなかにインド中世史とかインド洋海上貿易などを研究テーマに採りあげる若手研究者が出てきました。

3.　学問的な問題意識との出会い

以下に私の問題意識に関わるところをもう少しお話させていただきたいと思います。ヨーロッパの学者のなかで、特に影響を受けたのは、先ほど名前を挙げたギブに加えてウィルフレッド・スミス（Wilfred Cantwell Smith, 2000年没）です。この二人から大きな影響を受けたということは認めざるをえません。

ギブは、先ほども申しあげた、地域研究、イスラーム世界の地域研究に関する問題提起ということだけではなくて、非常に広く問題意識をいただいたと思っています。イスラーム教徒の側の新し

6）東京帝国大学の図書館の震災復興にあたって広く国内外から援助が寄せられた。1923年9月には当時の国際連盟で、東京帝国大学図書館復興援助の決議がなされ、イギリス、アメリカ、ベルギー、中華民国、フランス、ドイツ、ギリシア、イタリア、オランダ、シャム、イスパニア、スウェーデン、スイス、ロシア、国際連盟、その他、総計36の国および機関から援助が寄せられた。震災で全焼した建物については、アメリカのロックフェラー財団からの寄付を受けている。このときにイギリスから寄贈されたもののなかにイスラーム関係の本があった。

7）荒木茂（1884年～1932年）。ペルシア学者。コロンビア大学に留学し、インド・イラン語学者のアブラハム・ヴァレンタイン・ウィリアムズ・ジャクソン（1862–1937）に6年間師事し、1920年帰国。東京帝国大学文学部講師および学習院大学教授を務め、ペルシア文学とペルシア語を研究した。

8）『ペルシヤ文学史考』（岩波書店、1922年）。

9）荒木文庫は、1922年から財団法人啓明会から「波斯に關する研究資料ノ蒐集」の研究補助を得て蒐集された総数1224冊のコレクション。1931年に東京帝国大学文学部言語学研究室に保管され、1934年には『荒木茂氏蒐集・田中於兎弥氏編述波斯關係圖書目録』（啓明會紀要第15號）が出版されている。しかし、その後所属が転々とし、閲覧が難しい状態が続いた。2005年になって東京大学内の東洋文化研究所に移管され、現在、同研究所が荒木文庫を所有する。

い研究も出ていましたが、どうもアポロジェティックスというか、自分の主張が入ってくるものが多い。自分の主張と言う場合、宗教だけではなくてナショナリズムという要素も含まれるかと思いますが、イスラーム研究というのは、客観的で批判的でなければならないと考えていました。さらに、批判的というのは、「歴史的に」批判的でなければならないということだと思います。私の訳したギブの *Mohammedanism* という本の副題に「歴史的な分析」（An Historical Survey）とあるように[10]、歴史的な分析によって初めてイスラームをとらえることができるというようなことをギブは言っています。

それからもう一人のウィルフレッド・スミスの方でありますけれども、この人は 1940 年代くらいから大胆な著書を書いております。ウィルフレッド・スミスは、自分はコミュニストではなくてマルキシストと言っています。コミュニストだと党員になってしまうが、マルキシストだと自由な立場ということになるのでしょうけども、その辺りを区別して、組織に属さないマルキシストと名乗っているのでしょう。マルキシストとは言うものの、彼は実は自由主義の人、自由主義者であったと私は思っております。

このスミスの『インドにおける近代イスラーム』という著作がその当時出版されていました[11]。近代に、つまり 19 世紀の後半の 1857 年にインド大反乱が起きて以降に、モダニズムという思潮がムスリムの間に興ります。スミスは、その本のなかで、サル・サイイド・アフマド・ハーン（Sir Sayyid Ahmad Khan; それ以外の表記に Sir Syed Ahmed Khan がある ; 1898 年没）、イギリス自由主義の思潮の影響を受けて、ムスリムの立場からそれを採り込んだ最初の人ですけれども、サル・サイイドあたりのモダニズムから、それを克服する新しいムハンマド・イクバール（Muhammad Iqbal, 1938 年没）の思想までを採り上げています。イスラーム教徒のなかにも伝統主義だけではなくて、こういった近代主義の運動があることを私はスミスによって知り、そうしたことも採りあげて考えなければいけないということに気がつきました。スミスは、イスラームと西洋との相互理解のかけ橋となるように、カナダのマクギル大学イスラーム研究所（McGill University Institute of Islamic Studies）でイスラームのインテリとの間の対話を試みた人でもあります。

このマクギル大学イスラーム研究所からは、パキスタン人研究者のファズルル・ラフマーン（Fazlur Rahman, 1988 年没）といった、Gibb のいうアポロジェティックスの立場から離れた、イスラーム教徒の学者も生まれています。ただし、ファズルル・ラフマーンは本国パキスタンではあまり受け容れられなかったようです。

スミスは、東京大学の中村廣治郎さん[12] がアメリカ留学中の指導教官にあたる方で、中村さんはスミスのことをよくご存知だと思います。

東京大学東洋文化研究所助手の時代に国際宗教学宗教史学会議でマスィニョンにお会いした話をしましたが、ハレポタ（‘Abdul Wāḥid J. Halepota）というパキスタンのスィンド出身の研究者もその会議にお見えになっていて、彼から 18 世紀のデリーの学者シャー・ワリーウッラー（Shah Waliullah; 1762 年没）の思想を題材にした博士論文の出版物をいただき、シャー・ワリーウッラー

10）邦訳の初版は H.A.R. ギブ著　加賀谷寛訳『イスラム文明――その歴史的形成――』（紀伊国屋書店、1967 年。のちに『イスラム――誕生から現代まで――』（オリエント選書 9、東京新聞出版局、1981 年）、『イスラム入門』（講談社学術文庫、2002）としても出版されている。原著は Hamilton Alexander Rosskeen Gibb, *Mohammedanism: An Historical Survey*, London, New York: Oxford Press, 1949.

11）何度か出版されているが、初版は Wilfred Cantwell Smith, *Modern Islam in India: A Social Analysis*, Lahore: Minerva Book Shop, 1943.

12）イスラーム学者。1937 年生まれ。東京大学名誉教授。

の思想をはじめて知りました[13]。その博士論文を執筆した際の指導教官がギブだと伺いました。シャー・ワリーウッラーという大変な思想家についてギブが知っていたのは、おそらくこのハレポタの論文指導を通じてだと思います。

シャー・ワリーウッラーは、デリーの人ですが、メッカ巡礼に出かけて、メッカやマディーナでしばらく滞在して『究極の神の証（*Ḥujja Allāh al-Bāligha*）』というアラビア語で書かれた大変な大著を残しています。私がエジプトのカイロを訪ねたときに、カイロの本屋でこの『究極の神の証』が本棚に並べられていたので、エジプトで出版されていたこの本を持って帰りましたけれども[14]、この中を見ますと、ハディースの本来の目的は、人間の持っている基本的な欲求、衣食住の充足にあり、こうした基本的な欲求を充足させるために人間が社会あるいは政治制度を作っていくというマディーナ（都市）理論、あるいはタマッドゥン（文明）理論が述べられています。イスラーム教徒を含めて、人間が持っているそうした本性は近代ヨーロッパだけで見つかったように思っていたら、そうではなくて、近代ヨーロッパ思想とは別に、シャー・ワリーウッラーは、イスラーム的なマディーナ論の枠組みのなかで、イスラームの教義に束縛されずに人間の持っている欲求を認めていると知ったわけです。

シャー・ワリーウッラーはアラビア語とペルシア語で著作しておりますが、神学関係、哲学関係の著作はアラビア語で、スーフィズム関係はペルシア語で書かれている、どうやらそういうことではないかと思います。ウルドゥー語も当然知ってはいたでしょうが、やはり街の言葉にとどまっていて、学問の言葉にはなっていなかったということでしょうか。時代は違いますけれども、イランのアブー・ハーミド・ガザーリー（Abū Ḥāmid al-Ghazālī; d.1111）も、やはり神学的レベルの議論はアラビア語で書き、ペルシア語はもっとそれをポピュラライズするときに使っており、彼が二つのレベルを使い分けていたのと同じようなことがシャー・ワリーウッラーにも見られるように思います[15]。

次に、私が留学したイランに関する問題関心をもとに話を続けさせていただきます。私が興味を持っていたのは、イラン近現代史、特に1905年から第一次大戦までのイラン立憲革命でした。これについては主にペルシア語資料にもとづいて研究をいたしました。イラン立憲革命は、ナショナリズム論、帝国主義対ナショナリズムの枠組みでだいたいとらえることが出来たと思いますけれども、その後、1979年にイラン・イスラーム革命が起こると、どうもナショナリズム論だけではとらえられないということで、それからは、もっと新しい方がイラン・イスラーム革命以降のイランの研究をなさっていると思いますけれども、私自身イランに関してとくには発言を控えています。

他方、そうした歴史的研究とは別に、先ほどちょっと申しましたイマーム・ザーデ崇拝にも関心を持つようになりました。イマーム・ザーデ崇拝は、シーア派のいわば聖者崇拝であるという形で括ることもできますが、別の視点から見れば、他の一般的な聖者崇拝がそうであるように、民衆レベルのイスラーム、または民衆宗教としてのイスラームと見てもよいのではないかと感じています。

数年前、追手門学院大学に勤務していたときに、インドのウッタル・プラデーシュ州の小さな街

13）1949年に *The Prctical Theology and Ethics of Shah Walîullah of Dihlî* という題名でオックスフォード大学に博士論文が提出され、*Philosophy of Shah Waliullah* (Lahore: Sind Sagar Academy) として1970年代に刊行されている。

14）Shāh Walī Allāh, *Ḥujja Allah al-Bāligha*, ed. by al-Sayyid al-Ṣādiq, al-Qāhirah: Dār al-Kutub al-Ḥadīthah, 1964.

15）たとえばガザーリーのペルシア語著作『幸福の錬金術（*Kīmiyā' yi Sa'ādat*）』はアラビア語で書かれた大著『宗教諸学の復興（*Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn*）』の縮約本。それ以外にも王のために著述された『王への助言（*Naṣīḥat al-Mulūk*）』や王への書簡などがペルシア語で書かれている。

にある聖者廟を訪れたことがあります。インドでは普通、聖者廟のことをダルガー（dargāh）と言っております。私が訪れたダルガーにお参りにくる人は、だいたい「病気治し」などのお願いごとを持ってきますが、やってくる人はイスラーム教徒だけでなく、ヒンドゥー教徒も多数来訪します。それどころか、インドのキリスト教徒、スィク教徒もお参りに来ており、宗教を問わずここに来ているという場所でした。インドではウルスと言いますが、聖者の命日に特に人々が集まってきます。ウルス（ʿurs）とはアラビア語で結婚のことを意味し、聖者の命日のことを「結婚」を意味するウルスという言葉で呼んでいるわけです。不思議に思いますが、これは、スーフィー（聖者）は神との合一を願うということで、聖者が亡くなったということは聖者があの世で神と結婚している、というふうに考えられているのではないかと思います。

このダルガーにおける聖者の命日は二度あります。一つはイスラーム教徒だけが主な参加者となり、もう一つはヒンドゥー教徒が参詣に来るためのものです。またこの廟の周りが、ウルスの時に、みんなが野外にテントを張って過ごせるようにしているために、大変広い野原になっていて、これも興味深いものでした。私は、スーフィズムと言っても、神秘主義思想研究というエリートレベルでの研究ではなくて、民衆宗教レベルで見ていきたいと思っています。しかし、体力も気力もなくなりつつありますので、皆さんにそういう側面の研究をやっていただきたいと思っています。

それから最後になりますけれども、私は研究をはじめたときから今日まで、イスラーム研究者というのは、みな同志だというふうに考えています。同志の皆様には研究のために情熱を持ってあたっていただきたいとお願いして話を終わりたいと思います。

第2部：インタビュー（山根聡、東長靖）

Q：山根聡

Q． 指導教官にインタビューをするというのは、ちょっとお恥ずかしい感じがいたします。よく覚えていますが、加賀谷先生はいつも訥々とお話をされるのですが、私が出席させていただいた授業に、シャイフ・イクラーム・マリク（Sheikh Mohammad Ikram, 1908–1973）の *Mouj-e Kosar*[16] という南アジアのイスラーム思想史を扱った非常に難解な文章を読む授業がありまして、加賀谷先生は「この辺は、僕よく分かんないんですが……」とよくおっしゃいまして、加賀谷先生でも読めない物があるのかと思っていました。その後大学院に進み、大学院の授業にも出させていただいておりましたら、その時も「ちょっとこの辺よく分からないんですけど」と同じようにおっしゃっていて、そうなのか、と思って、研究室に一緒に戻ってくると、お茶を飲みながら「さっき分かんない、といった箇所ですけどね」と言って、全部説明してくださいます。結局、それは学生の質問を待っておられただけで、そのレベルに達していなければ、「よく分からない」のままにしておられたのです。これは厳しいと思いながら、授業に臨んだのを思い出します。

今拝聴したご講演から、加賀谷先生のご研究が非常に多面的なものであるがよくわかります。それは、分野として多面的である、例えばイラン研究であるとか、イスラーム思想研究、スーフィズムの研究であるとか、あるいはウルドゥー語学、ウルドゥー文学の研究であるとか、そういった多面性があるといったことだけではなく、何か一つの研究対象がある場合に、それを常に多面的

16）*Āb-e Kosar, Rūd-e Kosar* とともに南アジアのイスラーム思想史に関する同氏の三部作をなす。